

「臣民」と「野蛮人」

—J. C. スコット、立木勝訳『反穀物の人類史 —国家誕生のディープヒストリー』
(2019 みすず書房)

中 田 英 樹
(PRIME 研究員)

はじめに

もうかれこれ何十年も前のことだが、評者は小学校で次のように習ったことを覚えている——縄文時代の人びとは狩猟採集民族であり、長らく時を経て弥生時代に入ったことをもって、より高度な生物となり、穀物を育て、生活を安定させた——こうした日本古代の解釈である。

本著『反穀物の人類史』(以下『反穀物』と記す)は、この見方をまったく逆転させようとする。つまり、人びとは定住して穀物栽培をはじめ、そこから初期国家が生まれてきたのではない、というのである。当著では、その証拠となる例として、メソポタミアで初期国家をとりあげ、国家が誕生したのは、人が定住し、作物を栽培するようになって以降、4000年も経ってからのことだという事例が挙げられている。なにも「農業開始→定住化→国家の誕生」というトントン拍子の因果の連鎖は、私たちが無自覚にそう思っているだけの間違いである、とスコットは言う。

政治学と人類学、環境学を専攻とするスコット。その彼が、(専門領域ではない)先史学、考古学、古代史学、病疫学や環境工学の諸領域を横断した議論を展開する。自身、「思い上がりだと批判されても仕方がない」(p. viii) [(p. viii) とは本コラムでは本書の

viii頁を指すものとする。以下同様]

それでもスコットが挑戦する理由としては、第一に、専門外であるからこそ、上記先史学や考古学では自明のこととされてきた諸概念や定説となった時代の流れを、先験的に前提とするのではなく、新たに歴史的諸事実を捉え直し、結びつけ、使用できるということ。そして第二には、スコットがこの著の執筆に関わってきた直近20年において、『国家のまなざし *Seeing Like a State*』(未邦訳、1999年)や、とりわけ『ゾミア 脱国家の世界史』(2009年)において、ベトナム中央高原、インド東北部、そして中国南部——これら一帯を「ゾミア」と呼ぶ——を対象に、国家に統合されない人びとが、あえて焼き畑農業など「原始的」な生き方を選ぶことによって、国家による束縛から逃れた歴史を紡いできたことを実証しようとしてきた。

こうした彼の研究歴の末に、本著は『ゾミア』での考察対象をさらに時代的に遡らせて、「世界最初の「原始」国家が集中している」(p. xi) [傍点スコット] メソポタミアに移したものである。紙幅の都合により、あまりにも粗雑になろうが、簡単に各章のポイントを並べてみたい。

本著の構成

序章にて、まずは本著考察の理論的バックボーンや、著全体の課題や構成が簡単にまとめられたのちに、第1章では、特に「火」をめぐる考察が展開される。「植物」「動物」といった自然界の要素を「飼い慣らし」、「作物」や「家畜化」し、加えて火を使って調理のできる地域へと、人口が集中することが説明される。やがて転化するかもしれない「国家形成」のための（十分条件ではなく）必要条件としての、自然界へのこうした働きによって、人びとは集住化する。だが、これはダーウィンの「進化論」的な解釈——移動する狩猟採取民からより安定した農耕社会という発展の因果関係では説明できないとスコットは述べている。家畜を病気などから守るように丹念に世話をし、作物も植え付けから除草、収穫から脱穀といったように、この集住化は、そこで暮らす人びとをより一層厳しい労働へと導いたのである。そして「火の飼い慣らし」は、作物を単一化し、生活環境の多様性を失う過程でもあったというのだ。

第2章では、第1章で提示された議論の枠組みにのっとりながら、そうした狩猟採取民の世界が農耕民族の世界と対峙される。もちろんスコットの主張は、後者の方が、一般的に思われているのとは逆に、食事はもとより文化的にも、生きるためのやりくりは単一化し、家畜や作物の世話もきわめて融通が利かなくなり、暮らしにくい社会となったという。

第3章になって議論の焦点は最初期の国家、なかでも非エリート層が（国家の下層に措かれた「臣民」）、こうした時代変化のなかでどのような影響を受けたのかが、とりわけ疫病に関して考察されている。集住してから千年単位でゆっくりと形成されてきた（BC4000年からBC2000年頃までをかけて）最初期の国家において、トップに位置するエリート層は別として、国民国家が析出され、（多くは奴隷狩りという形態を取りつつ）国家に取り

込まれた下層「臣民」たちの生活は、①狩猟採集と比べて遙かに厳しい労働を強いられるようになったこと。つまり過度に人口過密になり、しかもその場に縛りつけられているがゆえに疫病や寄生虫が深刻な影響を与えたこと、②そしてその国家から徴収される納税、といったように、完全に国家の下層「臣民」となることがデメリットであることが説明されている。

穀物栽培が初期国家成立を可能とさせてきた歴史の解釈である。国家が維持されていくには、十分な数の「臣民」が必要である。しばしば国家の外壁を越える必要があるのは、新たな「臣民」を確保するためであり、彼ら彼女らの持つ貴金属や家畜といったものを収奪することである。この第4章でスコットは、囲い込み、強制的に国家内へと連れ込んだ「臣民」の大きな役割として穀物生産を強調する。作物といっても（今では世界の少なからずの地域で、主たるカロリー源となってもいる）キャッサバやタロイモ等の根菜は適さない。地下から採れるので、支配階層が安易にそこでの農業形態を把握できないからだ。また、大豆などの豆類も適さない。無限成長性の作物なため収穫期が特定されず、税の徴収官が管理しづらいからだ。だから小麦や米やトウモロコシなどの栽培が非エリート「臣民」に求められる。税額査定、収奪、保存、配給など多くの点において国家が自己を維持しやすいからだ。

以上が第5章から展開する議論の準備だといえる。第5章は本著のひとつのクライマックスである——ならばスコットはいかに「国家」を想定しているのだろうか。これは程度の問題だとスコットは言う。トップに王や女王がいて、それを取り巻く上流「臣民」から鋤を引かせる動物と同じ生き物でしかない非エリートが裾野を担い、道路や運河の建設、鉱物の採掘、そして農作物を栽培するという、制度的な体制の連続であり、そして通時的にはこれら諸条件をどの程度満たしてい

るか、その程度で国家かどうかが判断され得るという。

こうして狩猟採集民が農業をはじめた「野蛮人」は、第5章で描かれた「国家」とどのような関係を結んでいたのだろうか。完全に奴隷化されたのだろうか。スコットは逆のことを述べる。例えば、中国での万里の長城が、その外部からの野蛮人の侵入を防ぐためであったこともあろうが、むしろ逆に、国家内の納税者たる「臣民」が外へと逃亡しないためでもあったという。

これら人びとは、何も望んで自ら「国家」の「臣民」になったのではない。ホブズやロックの言うように、集まった人たちが平和で自由を求め、安定した社会的秩序を保持すべく「社会契約論」が取り結ばれた、といった「国家」の成立ではなかったという。

そして最後の第7章では、上記時代における初期の国家が、それに統合されない「野蛮人」に対して極めて脆弱な立場にあり、「野蛮人」は、焼畑農業や貝類の捕獲、放牧、芋類（これは国家にとっては都合が悪い。農業規模や収穫そして徴収すべき税が、簡単に確定できないからだ）など、多様な食物を得られる所へと移動していた。時には国家はそれらを「略奪」するよりかは、むしろそうした「野蛮人」と交易関係を結ぶほど、「野蛮人」の世界は多様で柔軟性のあるものだったことが述べられ、本著は終わる。

「モラル・エコノミー論争」の片翼の代表者としてのスコット

当時紛争下にあったインドシナ半島地域における「未開」社会の、まったく対照的な解釈を引きだした両論客たちのあいだで「モラル・エコノミー論争」が繰り広げられた。この論争自体は（中田 2004: 847）にまとめてあるが、ここではこの『反穀物』へと至る、その40年程の前に彼が全面的に展開した概念「モラル・エコノミー」からの

評者ならではの読みを、一点に絞って述べてみたい。

評者の引っかかる点をまず言おう。一言で言えば、インドシナ半島地域で多発している現地農民らの反乱鎮圧へ向けたデータの提供とそれに基づいた戦略の立て方への提言が、最終的な目的として潜んでいる。圧倒的な軍勢力をもってしても、なぜ執拗な抵抗勢力は根絶やしにできないのか。彼ら彼女らとはいったい「私たち」（主には米国人）と何か根本的な差はあるのだろうか。とどのつまりは、「この相手にしている「未開社会」とはいったいどのような社会なのか——まったく「私たち」と同じ近代合理主義の住民なのか。あるいは、まったく異なったメカニズムによって駆動される異社会なのか。

この前者の代表格として、T. W. Schulz (1964) が挙げられるだろう。対象とする「未開社会」は、たしかに電気やガス、十分な住居などもない、先進資本主義社会とはかけ離れた様相を呈しているが、そうした環境下でも住民たちは「文明人」と同じように経済合理的な行動を取っているのだ、というものである——だから次のように述べる。これが重要だ——だから先進国が技術をはじめとした支援をすることで、こうした社会は「発展」した「私たち」の社会により一層近づいていくことだろう——こうして展開されたのが「緑の革命」であった。

そして後者の代表格が、「モラル・エコノミー」概念を広く知らしめたスコットだといえる（Scott 1977）。この概念の内実は評者による事典での内容や、中田（2013: 第2章）などを参照して頂くとして、ここで重要なのは対象「未開」社会を、「私たち」先進資本主義社会とはまったく異質のメカニズムで駆動され、住民たちも資本主義社会の「私たち」のそれではなく、独自の相互扶助に支えられた行動規範に基づいているとしている点である。

スコットも言うように「国家」はずっと周辺に生きる「野蛮人」を取り込み、支配し、統括してきた。そしてその「野蛮人」とは、彼ら彼女ら独自の行動規範に基づいて動く人たちである。これをScott (1977) では、インドシナ半島にて列強（特に西側）先進国から観察し、「では「私たち」とはどのように異なった合理的な独自の行動規範に則っているのか」。あるいはたとえ取り込んだとしても「そのなかでどのような不服に対して、逃亡したりサボタージュをして「抵抗」するのか」(Scott 1987)。「私たち」とは異なって、どういう一線を国家が越えて干渉してくれば堪忍袋の緒が切れるのか。「私たち」とは異なり何を求め、守ろうとするのか。

たしかにこうした「野蛮人」の解釈は、なるほど彼ら彼女らの独自の世界を生き生きとしたものとして読者は受け止められよう。だが、こうした解釈を精緻にすればするほど、評者には次のように彼がリアルタイムでのインドシナ半島での「国家」が「野蛮人」に対する成果としての側面もまた強調されていくのではないかと思ってきた——「国家」が波風を立てずに「野蛮人」を包摂し統合させるための、より完成されたマニュアルとならないか。考察対象の時代を過去へと遡れば、その当時に「野蛮人」を統治してきた「国家」もまた過去化される。このスコットの「モラル・エコノミー」を現在のどこかの社会に当てはめるのならば、その統治の「私たち」に自らは距離が取りにくくなるだろう。

よってさらにここから少し議論を掘り下げてみたい。スコットの著作を彼の半生に時系列的に並べることで見えてくるのは、BC4000年以上も前から、時代時代においてその都度「野蛮人」とされた人びとの、独自の社会構成であり、その人たちの行動規範の強い主体性である。何も国家によって常に客体として都合よく動員されてきただけとは言えないはずだ、という。この構図を明確

に浮上させるために、スコットは「臣民」と「野蛮人」が明確に線引き可能な紀元前まで、分析対象を時代的に遡らなければならなかったと評者は憶測する。

たしかに評者も、スコットのこの思考の意思はよくわかる。主体（subject）は主体性を発露させればさせるほど、それは何かに従属する（～be subject to～）ことを不可避とする。それゆえに、評者にはスコットに対して次の問いかけをしたくなるし、あるいはそれは私たちに託された課題でもあろう——もう一度この対象をめぐる議論を、私たちの日々暮らす現代社会において応用させれば、どのような議論が広がっているのだろうか。

議論が紀元前のメソポタミアを対象に展開されているのならば（あるいは展開されているからこそ）議論できた点も多いと思う。なぜならば「国家」といっても、それは「いま・ここ」を生きる「私たち」の暮らす社会は含まれないからだ。

だが現在、多くの場合、「テロリスト」と呼称を宛がわれる「野蛮人」の社会は、もはや地理的に特定できない。だがムスリム圏への軍事攻撃をはじめ、先進諸国都市部中心の強制的なジェントリフィケーションなど、もはや「南北問題」が死語と化したかのように、そうした社会は「南—北」問わず「いま・そこに」ある。

したがってこの著は、太古を見つめて読むだけではもはや不十分なのだ。精読し、咀嚼し、私たちの暮らす現代社会の抱える諸問題へと応用していくこともまた、この著は課題としての射程内に収めている。事実、スコットの最新の有名な著は、この現代社会における「アナーキズム」を求める市井の人たちの日常に考察が加えられている。そしてこの課題は、現在を生きる「私たち」のそれでもある。

参考文献

- 清水展、2019年（J. C. スコット著、清水展・日下渉・中溝和弥訳『実践 日々のアナキズム —世界に抗う土着の秩序の作り方』、「訳者あとがき」、岩波書店、2019年）
- Scott, James C. 1977. *The Moral Economy of the Peasant, Rebellion and Subsistence in Southeast Asia*, New Haven: Yale University Press（高橋彰訳、『モラル・エコノミー 東南アジアの農民叛乱と生存維持』、勁草書房、1999年）
- Scott, James C., 1987, *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*, Yale University Press.
- Scott James C. 1999. *Seeing Like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed*, Yale University Press.
- Scott, James C., 2009, *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southern Asia*（Yale University Press）（佐藤仁監訳『ゾミア 脱国家の世界史』、みすず書房、2020 [2013]）
- Scott, James C. 2012. *Two Cheers for Anarchism: Six Easy Pieces on Autonomy, Dignity and Meaningful Work and Play*, Princeton University Press,（清水展・日下渉・中溝和弥訳『実践 日々のアナキズム —世界に抗う土着の秩序の作り方』岩波書店、2017年）
- Schultz, Theodore William. 1964. *Transforming Traditional Agriculture*, New Haven: Yale University Press.（逸見謙三訳『農業近代化の理論』、東京大学出版会、1966年）
- 中田英樹「モラル・エコノミー論争」、『文化人類学文献事典』、第Ⅲ部 論争のトピック、弘文堂、847頁、2004年
- 中田英樹『トウモロコシの先住民とコーヒーの国民 —人類学が書きえなかった「未開」社会』有志舎、（とりわけ第2部）、2013年